

支配からの離脱

—「白渦」の華乃倩をめぐって—

堀 黎 美*

FREEDOM FROM OPPRESSION

— On Hua Naiqian in “Baiwo” —

Reimi HORI

In the world-shaking Tian an men incident in 1989, the students demanded democratization of politics, while Chinese government succeeded to bring them under military control apparently. However, there is no way for the government to prevent gradual changes taking place in the mind of Chinese people.

The informationalized society brings about various senses of values, being impossible to return to such an age as some person would bring one billion and hundreds of millions people under his control. Thus, China goes on groping for its way by trial and error toward the twenty-first century.

There are also signs of changes in the constraint of family which has supported Chinese morals and society.

“Bai wo” (“White whirlpool”) is a literary work set in such changing times, though the life-style of the heroine (Hua Naiqian) can not be considered to arouse public sympathy at once.

はじめに

世界を驚かせた '89年天安門事件で、政治の民主化を要求する学生を、一時は武力で制圧したかに見えた中国政府も、民衆の心が徐々に変化していくのをとどめる方法はない。情報化社会は価値観の多様化をもたらし、誰かの意志で十数億の人間を統一していく時代には戻れない。中国も模索と試行錯誤を重ねつつ、21世紀を迎えるのであろう。これまで中国の道徳、社会を強固に支えていた家族の羈絆にも変化のきざしが見られる。「白渦」はこの時代の変化を背景に生れた作品である。ヒロインの生き方が人々の共感を呼ぶのは、少し難しいと思うが。

* 教養部

一.

白渦（劉 恒著 約6万4千字、日本語訳にすると4百字詰原稿用紙450～60枚か）の主たる登場人物は、某漢方医学研究院の研究室副主任（主任は高齢で病氣勝ちのため実質的主任）で44才の周兆路、彼のもとで研究し修士位を得る美しい華乃倩36才、彼女の夫で鋼鉄学院の製図講師林同生の三人で、話はすべて周兆路の目を通して語られ、周兆路と華乃倩、周兆路と林同生の会話の場面以外に、華乃倩、林同生の思惟が語られることはない。端的に言うと、①兆路が部下の乃倩に誘いをかけられ、②数ヶ月にわたり婚外交渉を持ち、③諸事情を勘案して何とか別れようとする話である。この間約八ヶ月。以下兆路の気持の変化を要約する。

①周兆路はまじめで有能、性格は温厚かつ謙虚、漢方医学界ではかなり名を知られ、院内でも人気がある。権力亡者ではないが、正当に評価され昇進したい気持はある。なかなかハンサムで家には中学の国語教師をしている妻と一女一男がいる。ある日「〇月〇日〇時に、〇〇でお待ちしています……」との乃倩のメモを見つけ、迷ったあげく上司として穏便に対処すべく出かけていく。だが彼には自分が墮落しかけており、遅かれ早かれ深みにはまる予感がある。二人は一夕を公園で語り合い「あなたが好き」と言って唇を求める乃倩に、彼もまじめに応じる。その瞬間彼はまるで一冊の素晴らしい本を読むかのように魅きつけられてしまい、ページをめくるのが惜しい気がした。初夏の夜の空気さえ、彼が美しい女にキスしたことを支持しているように思えた。「罪の意識を感じて？」と問われ、「どうしてそんなことを？考えもしなかった」と答える。別れ際「家庭をこわしたりしないから」と乃倩は言い、自宅に入る前兆路は「私はいかなる罪をも恐れませんが。あなたの拒絶をも含めて」と書かれていた乃倩のメモを、細かく破り捨てる。

彼らはもう一度機会を都合して逢い、思い合っている者同士の会話をする。そういうことをしている自分が兆路本人にも信じられないが、いずれ彼女の最後の捧げ物を得たいとの明確な欲望を感じ、自分はもうだめだと思う。

②夏になり、研究院恒例の北戴河（河北省の有明な避暑地）旅行があった。他人に気付かれないうちに二人は別行動をとることにし、兆路はずっと部屋にこもって翻訳することにしたが、二人の間に何かが起る予感がある。ある夜ついに乃倩が訪れ彼は迎え入れる。彼の発散の激しさは自分でも驚くほどだったが、セーブする気はなかった。かつてない快感のなかで、合法的に彼に所属する妻と始めての時失敗したのを思い出し、両者を比較し、乃倩の淫蕩なからだを忘れることはできないと思う。後悔はなかったし、かつて恐れた墮落という言葉をも軽蔑した。翌日二人は野外でもう一度、めくるめく時を持つ。

帰京後、乃倩は休日しか使わない旧友の部屋を逢引き用に借り、二人はそこを数回利用する。

③秋、家族を顧みる心の余裕がない間に、小学生の息子の喫煙事件が起き、兆路は妻や子に済まない気持が次第に強まり、乃倩との関係も清算する潮時かもしれないと思う。しかしつぎに誘われた時自分の決心の弱さを知るが、これが最後、と自分に言訳をして出かけていく。クライマックスの時にも「愛している」と言ったことはなく、彼は乃倩を決して愛してはいないのに気付く。

ただ彼女を弄んだ感覚がある。乃倩が突然「あの人だめなの」と言い一瞬呆然としたが、意味を理解した時、弄ばれたのは自分の方ではないかと思う。彼女の誘惑力は更に強くなったが、自責の念は逆に減る。彼女の美しいからだだが、まるで二人の共同の道具となった気がする。

彼の論文が本年度全国最優秀賞を獲得、そのうえ有力な筋から、副院長に抜擢する予定だから精神的準備をしておくように言われ、暗に身辺整理を仄めかされたのかと不安になるが、いずれにしる乃倩とは別れよう、男の社会的成功は女を魅きつける、乃倩が自分を求めた理由もそれだったのだと思う。

受賞祝賀会のあと、二人は偶然をよそおって書店で会う。情婦という言葉が彼の脳裡に浮かぶ。乃倩は夫と離婚するつもりだと打明ける。あなたとの事とは無関係だと言う彼女の決心は固い。その時兆路は白づくめの服装をしている乃倩を見て、白は清潔を象徴する色で、彼女には似合わないと感じる。しかし別れ話に彼女がどう反応するか見当もつかない。

副院長昇格人事がかなり具体化してきたこともあり、はっきり手を切る決心で、始めて彼の方から連絡したのに対し、思い違いをして嬉しそうにしている彼女の察しの悪さに苛立つ。本当に愛しているのならば、彼の苦しい立場を理解すべきであるのに、この女はおれをしぼりとるだけだと。だが心の底では、その心をとろかせるからだに末練がある。別れ話をする場所を変えたかったが、彼女の反応を案じいつもの部屋に行き、彼女を抱いたあと「よくないことだったが、君といて楽しかった。だがこれ以上続けられない。君のことは忘れない。何度も考えた結果だ。別れよう」と告げる。「あなたが私を愛していないことは分っていたわ。でもこんな風に別れるのはいや。あなたには本当にがっかりだわ」と泣く女に対し「許してほしい。これからは最も親しい友人であってほしい」との兆路の言に「ご昇格おめでとうございます。ますますご順調なご出世をお祈りするわ」と一矢を酬いた乃倩の目は涙が溢れているが、涙の裏側にはっきり嘲笑が隠されており、彼はショックを受ける。自他ともにずっとあざむいてきたが、道德感で別れるのではないことを彼女は知っている。

冬休みに入り、妻は子供達をつれて上海に里帰りした。別れ話のあと勤務先での乃倩はごく自然に兆路に接しており、すでに危機は去ったのか、彼に対してもっと致命的な打撃を準備しているのか判然としない。

妻の乃倩が離婚を言い出しているのを何とかして上司から翻意させてほしいと、夫の林同生が訪ねてくる。彼はもちろん妻と兆路の情事は知らない。「子供さえいなければ、あの女を殺してやりたい」と言う林同生に、「何とだらしない。乃倩がこの男をだめにしたにしる、彼自身にも責任がある。男というものは女に対し常に有利な立場にいないければだめなのだ。この男はなぜ乃倩をおさえられないのか。彼女が何だ、妻なのだからすべての手段を講じて征服すべきではないか。彼に生理的欠陥があるのは本当かもしれないが、それはそんなに重要なことではない。乃倩の飢餓感が異常なのだ。夫を破壊し兆路をも破壊しようとしている唾棄すべき女、これまでに何人もの男に「愛しているわ」と言ってきたに違いない」と思う兆路には、憤怒と同時にざまみろという気持がある。その淫蕩な女を彼は捨てたのだ。

数名の競争相手に打ち勝って兆路の副院長昇格が決定し、かねて話のあった日本の神戸医大からも、正式に講義を依頼する招請状が届く。日曜日にひとり家にこもって読書していると、乃倩が訪ねてくる。妖魔の訪れのように。

「この家の主婦になれるのなら一千回死んでもいいわ。奥さんに嫉妬するわ」と言う美しい顔に、持っている茶碗を投げつけてやりたいのを彼はかろうじてがまんする。「私は望みが高いの。愛せない人と別れて好きな人と暮したい。私の離婚はもう引き返せないわ。あの人が何と言おうともうあの家には帰らない。一番苦しい時期は終わったわ、あなたのことはまだ愛しているけれど、もっとふさわしい人を探して再婚するわ、あなたはだめ、エゴイストすぎる。でも淋しくて耐えきれない時は会いにくるかもしれない」「淋しくなんてならないさ、君を愛する人はたくさんいるのだろう？」「どう言う意味？」言わずもがなのことを言ったと兆路は思った。「副院長になったからって、私を無関係な人間だとは思わないでね。私はすべてをあなたにあげたのよ。これは事実よ」「君に対して済まない点があったかもしれない。だが私だけの責任ではない」「それでおしまい？なぜ最後まで責任を負わないの、なぜすべて私に押しつけるの？私は復讐だってできるのよ」「誰のためにもなるまい」「どちらにとって、より不利かしら？」「どうしろって言うんだ？」彼は乃倩がかつてなく醜いと思った。「あなたの家庭をこわしたりはしないわ、もう少し優しくして！」乃倩がいきなり彼を抱きしめた。不意をつかれて身を防ぐすべがなかった兆路の脳裡を、「本当にあれを殺したい」と言った林同生の言葉がよぎった。「ここではやめてくれ」「どうして？」「私が許さん、ここは私の家だ」「だけどあなたは私のものよ」「たのむから……」彼は屈服した。午後、彼の家から出てきた乃倩は美しかった。しばらくして、さっそうと意気軒高な兆路が出てきた。しかし彼の後姿には影があった。

3月1日、彼の副院長就任演説は大成功をおさめ、拍手する聴衆の中に乃倩もいた。どこにいても彼女の存在は分ったが、永遠に消えて欲しかった。突然目眩がし、束縛が消え自由になった気がした。彼はどんどん上昇する。“注意しろ”小さな声が聞こえ彼は笑った。その声がどこからの声かは分っていたが、兆路はすでに恐れはなかった。

二.

白渦のような小説が現れてきた背後には、社会の大きな変化がある。まず生活水準の向上、住宅問題の緩和がある。都会では日本のニュータウン式の新しい団地に人々が移住するようになって、旧来の四合院や雑居住宅のような相互監視がしにくくなり、テレビをはじめ電化製品が普及し、串門というあちこちの家におしゃべりをしに訪ねあう習慣も減り、プライバシーが保ち易くなった。不倫そのものは当然これまでもあったが、個人の権利意識も高まり、数年前のように周囲がやたらに干渉するのも許されなくなり、また、衣食住に以前ほど全精力を使い果さなくてよくなり、気持ちに余裕ができ、離婚もかなりしやすくなってきている。農村においてはまだ封建的な家父長制が根強く残り、本人の意志に反する売買婚や交換結婚が行われている所も無くならないが、白渦の登場人物は北京の知識階級で、経済的にも裕福な、中国全体から見ればどちらか

といえば少数派に属し、従って一般的とはいえないが、華乃倩のように自分の意志と行動力で自分の前途や相手を選んでいく姿勢には、新鮮味を感じる。華乃倩の行動は意識的にか無意識かは別として、旧来の道徳への果敢な挑戦でもある。

以下もう少し詳しく華乃倩のこし方、及び周兆路とのかかわりを見てみよう。

林同生が兆路に語った話から察するに、乃倩は文化大革命中に高校を卒業して農村にやられ、のちに工農兵学徒（当時は高校を卒業すると農村や工場に配属され、何年か労働し、周囲や上司の推薦を受けなければ大学を受験できなかった。彼らを労農兵学徒と言い就学年限も少なかったから、現在では文革前や後の正規の大学卒業生より、一般的に学力が劣ると見なされている）になり、卒業後市の医院に配属された。そこで林同生と知りあい結婚し、彼は乃倩が北京に移れるよう非常な努力をした。（農村から都市に自由に戸籍を移すことは認められておらず、それをするには上司や要路にある有力者に金品を送って根回しをするなど、大きな負担を要する）子供が生まれた頃は夫に対してやさしかったが、やがて北京医学院の研究生となった頃から夫婦の間にすきま風が生じ、乃倩は離婚を考えるようになったらしい。北京医学院から更に研究院（社会科学院に所属する）に進み、学位を得た有能な女である。従って林同生は、今では乃倩が自分と結婚したのは北京に戻るための手段として利用したのだと思っている。彼は妻を押さえつけることはもちろんできず、信ずることもできず、妻の鞆の中まで調べ、以前年下の同級生から彼女にあてたラブレターを発見し、妻をなぐったことがある。その時彼女は離婚を要求したが、うやむやのままここ数年暮してきた。最近また乃倩は離婚を言い出しており、子供さえいなければ乃倩を殺したいほど思いつめている。それを聞いた兆路は乃倩と同生の関係に思いを致すよりも、自分とこと以前に乃倩には秘密があったのかもしれない、自分の魅力が彼女をひきつけているのであって、自分以外には潔白だと考えたのは浅はかだったと乃倩への不信感を抱く。ここにまず兆路の身勝手さが見える。もしも兆路が生身の乃倩を受け入れるのであれば、過去を含めた現在の乃倩であるべきだし、愛していずに快樂のみを求めたのであれば、疑惑を抱く資格はない。

一方乃倩の夫への気持は、これも彼女が兆路に話したところによれば、夫は全く無能で役立たず、あれでどうやって学生に製図を教えているのかと思う。向上心が全くなく凡庸な暮らしにどっぷりつかっているだけであると。乃倩がなぜこの夫と結婚したのかは彼女自身は語っていないため、果して利用したのかどうかは不明。当時彼女の周囲にいた男性の中で、一応知識分子と言えるのは同生だけだったのかもしれないし、結婚してみて始めて同生の無能さが身にしみたのかもしれない。性格も人生観も全く一致していない夫婦でも、これまで現状変革を好まなかった社会では離婚は難しかったが、乃倩と同生の場合夫婦としての結びつきが回復するとは考えられず、法律的に縛りつけているだけである。最近是中国でも徐々に破綻婚は離婚させるようになってきているが、周囲の圧力が全くなかったとは言えまい。しかし林同生がなぜ離婚に同意しないのか、それは一度結婚してしまえば妻は自分が所有する女になった訳で、結婚生活を維持していくためには自分も努力する必要があるなどとは考えもしないし、別れて出ていかれては自分の財産が減り、面子がなくなるからである。体面と未練を自分の愛情だと思い違いしているだけである。

乃倩と兆路の関係は乃倩の修士論文を兆路が指導する時始まった。そのいわば業務上の接触時に彼女が身体的にも接近しすぎると思いながら、兆路は敢えて避けようとはしていないし、メモを発見したあとも妻には理由を偽って指定の場所に行き、立っている乃倩の姿を見て「何と美しいんだろう」(原文P88)と感嘆している。彼女の美しさに対する彼の評価が、逢引きを重ねるごとに変化していくのが彼の気持を表現していて興味深い。公園で気持を打明けられキスまでしていいよ別れる時、兆路は「今日の事は私に責任がある」(原文P94)と言い、乃倩は「私達共同の責任だわ」(同じくP94)と答えており、彼は落し穴に落ちて墮落するかもしれないとの内心の不安を感じながらも、この時点では自分の責任を回避してはいない。

その後は仕事でも目の前に常に彼女の美しく魅力的な姿がちらつき、つぎに彼女と二人きりで逢った時には「倩！」(親しい間柄でないとそういう呼び方はしない)と呼んで纏綿と睦言をささやき、彼女に強い欲望を感じている。本文では“就是有朝一日能得到她的最后奉献”(P101. いずれの日か彼女の最後の捧げ物を得るだろう)との彼の本心が描写されている。彼にとって表面をどう取りつくろおうと、乃倩は対等の人格、互角の愛情を交わしている相手ではなく、女の性を献げ物としか見ていないことがわかる。しかし乃倩の家に招かれて、始めて林同生に会った時の兆路の心理は当然非常に複雑なものがあるが、妻と夫を比較し、乃倩に同情した。

夏、研究院の北戴河旅行の期間中、二人は遂に二回激しい時を共有する。その時“他的发泄凶狼得連自己也感到驚訝。但他沒有設法阻示自己”(P124. 彼の発散の激しさは自分でも驚くほどだったが、セーブする気はなかった)し、かつてない非常な快感にひたる中で“是有合法地位的属于他的女人”(P124. 合法的に彼に所属する地位にある妻)と乃倩のからだを比較するのだが、妻を合法的に自分に所属する女と考えているのであれば、当然乃倩は非合法に彼に所属した女とみなすのであろう。ひとたび体の接触があれば「自分に所属した」と考えるのは、優秀な共産黨員として、「女と男は対等な人格である」と標榜しなければならない立場はどうなるのであろうか。

秋口、乃倩は旧友が休日にしか使用しない部屋を借りる。そこで乃倩と兆路は数回二人だけの時間を持つのだが、兆路の息子に問題が生じかけ、また彼の昇格の話も出始め、そろそろ乃倩と手を切るべきかと考え出す。彼はこれまで乃倩に決して愛情を感じてはいなかったことに気づくと同時に、“玩弄”(P140)したやましさをを感じる。前出の「发泄」にしろこの「玩弄」にしろ、乃倩の人格を無視しているからこそ出てくる言葉であり、乃倩の側に立って見るならば、お互いの家庭に影響させないとの条件つきであっても、真剣に兆路を愛し、兆路に賭けたのであるから、たとえ別れる事態になっても弄んだやましきなど感じるはずがない。対等な人格として愛情を交換したのであれば、それが続かなかつたとしても後悔しないであろうし、まして性は品物ではないのだから自分が墮落したとか、汚れた感覚などあるまい。ところが兆路は乃倩の夫が不能だと聞かされたとたん、弄ばれたのは自分の方だった、乃倩が自分という男の有能さに魅きつけられたものと自負していたのに、単なる欲望の道具でしかなかったのかとの思いに愕然とする。つまり自分の気持を裏返ただけで乃倩の心を忖度し、彼女が肉体的欲望のみで彼に接近したと考え、自負心が傷つくと同時に彼女に対するやましきも失われ、乃倩の美しい肢体が二人の快樂の道具

として、更に誘惑の度を増したように見えてくるのである。もともと兆路の感じたやましさは、合法的権利を有する自分の妻と乃倩の夫をあざむいている心理から発生するもので、乃倩本人に向けられたものではないのである。兆路から見れば、法律的に正当な所有者かつ管理者が不能のため、身をもてあましていると考えられる乃倩には、弄んだ結果となってもなんらやましさを感じる必要はないし、つぎに会った時白い服を着ている彼女を見て、清潔を象徴する白は彼女にふさわしくない、この女は自分を“只知一味兎地搾取”(P153. ひたすらしぼり取るだけだ) と考えるのである。乃倩は離婚しても自分で生活していける収入があるし、少なくとも文中において兆路に金品を要求したり贈られる場面はない。逢引きの場も乃倩が準備したものであるし、兆路は何を搾取されるのであろうか。まして乃倩は清潔をあらわす白は似合わない女と見る兆路の考え方は、非人間的に女を縛ってきた旧道徳から一步も踏み出していない。乃倩が白を着る資格のない汚れた女と考えるのであれば、兆路も白を着る資格のない汚れた男なのではあるまいか。

昇格人事が大詰に入り、兆路は身辺整理の必要を感じ、隠れ家で乃倩を抱いたあと別れ話をする。ここにも彼の自己中心さが見てとる。行為が終った直後に別れ話を持ち出すなど、乃倩がどんなに傷つくかも考えられないのだろうか。別れ話をする決心であるなら、それなりに場所を選んであくまでも誠意をつくして納得させるべきである。表面を飾った兆路の言葉に、乃倩は涙を流しながらも「ご昇格おめでとう」の一語で相手の偽善をつき、彼が決して彼女を愛してはいなかったこと、別れる真の理由を見抜いていることを示し、彼はショックを受ける。乃倩が兆路に求めたものは、結婚は望むべくもない以上彼の愛だったはずだが、そのたった一つのものを也得られないことに敏感な女が気付かぬ訳がない。気付きながらも、危い橋を渡りながらも何とか維持してきた兆路との関係を、自分の昇格のために一方的に切り捨てられた時、乃倩は深く心に期する所があったに違いないし、兆路は自分の偽善に否応なく気付かされ、恥じ入らざるを得なかったと思われる。しかし自分の行為に恥じ入りはしても、乃倩に対し誠意をもって自分の行動を反省するまでには至らず、離婚を要求する妻を何とか翻意させて欲しいと訪ねてきた林同生を見、自分の妻なのだから凡ゆる手段を講じて征服すべきだ、と改めて思うのである。たとえ夫婦であれ、人間が人間を征服できるなど考えるのは、あまりに皮相な見解ではなかろうか。

めでたく副院長昇格が決定した後の冬のある日曜日、妻子が上海に里帰りし、兆路ひとりが家にいる時に突然乃倩が訪れ、彼は嫌悪感を覚える。言葉や態度のはしばしにあらわれる冷淡さに「副院長になったからといって、私を無関係な人間扱いはしないでほしい」と乃倩は非難する。「事実は事実なのだから」と。この時兆路は「私だけの責任ではない」と逃げを打ち、「なぜすべてを私に押しつけるの、私は復讐だってできるのよ。あなたはこれまでだってちっとも私のために考えてくれたことはなかったわ」と指摘されると、怒りの表情を浮かべている乃倩を見て、何と醜い女だと思う。自分が関心を抱いている時は美しい女だったのが、関心が去ると醜い女になるのか。頭にきた乃倩がとびつく感じで二人はもつれ合い、これまでの繰り返しが再現される。彼女に屈服する瞬間“我真想殺了他!”(P176. 本当にあいつを殺してやりたい) との林同生の言葉が彼の脳裡をよぎる。その時点から兆路にとって乃倩は、妖魔のような殺したい女に変っている。

女が自分に対して従順でないのに腹を立てた瞬間から、兆路は軽蔑していた同生と同次元に落ちてしまった訳である。

三月、副院長就任演説のあと、つまり権力を手にしたあと、彼はすべてから自由になった気がするところで小説は終る。

ハヶ月前後の乃倩と兆路の関係であるが、このあとの二人はどうなるであろう。兆路が副院長の権限を用いて決断するか、あるいは優柔不断のまま腐れ縁としてもうしばらく続くのか（実際問題として時間的に余裕がなくなるし、人目に立つだろうから継続は無理だろう）は別問題としても、乃倩の気持も遠からず兆路から離れていくものと思われる。常に積極的に自分の道を切り開いてきた女として、自分に愛情を持っていない男を追う愚かさに気付く、いやすでに気付いている。だからといって林同生のもとに帰ることは絶対にあり得ない。たまたま同時に発生したとしても、乃倩においては夫と離婚することと、兆路を愛することは、因果関係ではないし、二者択一でもない、全然別なことであろう。彼ら兩人以外のもっと彼女にふさわしい、愛を分かちあえる人を見つけて結婚する、と兆路に言っているが、乃倩の性格から見れば結婚より仕事を選んだ方が良さそうだ。能力を生かし業績をあげていけばよい相手に会える可能性もでてこよう。このまま国内で結婚しても、必ずまた旧道徳、旧思想の残りかすと磨擦を起すだろう。無能で向上心のない男として描かれている林同生、有能で向上心もある周兆路も、ともに乃倩に対する帰結は同じであるように。つまり結婚したら、男は常に女に対し有利な立場に立たねばならない、女がどのようにすぐれた能力の持主でも、ひとたび結婚すれば男に所属する存在なのだから、いかなる手段、方法を講じて男の支配下に置くべきだとの、男達の心に巣食う支配幻想を、意識的にか無意識にかにかかわらず踏みにじり、自己の意志で行動する従順でない女は、抹殺されてしかなるべきだとの。

三.

ともあれ、いずれにしろ不倫は奨励される事ではないし、乃倩のやり方には思慮に欠ける面もある。それに彼女は旧道徳に挑戦しようと理論武装して行動を開始した訳でもない。インテリではあっても一市井の女である。この点が関心と呼ぶのである。心ある人の意識された声や行動が口火を切ることはあっても、実際に無意識の庶民が行動した時、社会は変化して行くのだと思う。たかが一女性の情事から導き出す結論としては大げさすぎるかもしれないが、個々人が各場面で「これからは私の思い通りにやるわ」と言い出せば、既存の秩序を絶対化していた部分は打撃を受けるのは明らかである。

「白渦」を読みながらずっと対比していたのが「井」（陸文夫著 原文約4万6千字、'85年度《中篇小说選刊》優秀中篇小说創作賞受賞）のヒロイン徐麗沙の生き方であった。乃倩の積極性を際立たせるため少し紹介する。

徐麗沙は資産家の第何夫人かの子供としてこの世に生をうけ、解放後大学で薬学を専攻した。経済的には困らなかったが、生母が早く死んだため、愛に欠けた孤独な環境で育ったせいか、美

しいが人づきあいの手先の女で、罠にかかりろくでなしと結婚し、悲惨な忍従を強いられ、また資産階級出身を理由に当時の風潮から周囲からもいじめられる。何とか自分の活路を切り開きたいとあがくがうまくいかない。文化大革命が終ってやっと専門が生かせるようになり、研究に打ちこみ新薬製造に成功し、勤務先の工場に大きな利益をもたらすが、美しすぎるのと、テレビに出たりしたことが周囲の嫉妬を招き、あらぬ噂を立てられ、井戸に身を投げて一生を終えるのである。この時麗沙は50才前後、乃倩よりほぼ20才年長になるだろうか。たまたま両者とも知識階級に属する現代の女ながら、麗沙は典型的な薄幸の美女型と言えようか。

徐麗沙の悲劇の大きな要因は時代にある。「井」の登場人物のひとり、馬お婆さんの言葉にすぎのようなものがある。「あの家の人、自分勝手に封建的で女を見下しているの、どうしようもないから何とかして別れたい」(P25)と麗沙が言ったのに対し、「あれ、それはいけないよ。そんなことで別れるなんてよくない。女は一度嫁入りしたら辛抱しなければ。私なんてもっとつらかったよ。ぶんなぐられて歯なんかすっかり無くなって、これはみんな入れ歯なんだよ。(中略)離婚すりゃ女の値打ちも下るし、もっと暮しにくくなるよ。欠点のない男なんていないし、再婚してもまただまされるかもしれないじゃないか」(P25)

この言葉は二十数年後、麗沙が人生の最後の一刻を途方にくれて井戸端に座っていた時、偶然通りかかったすっかり年老いた馬お婆あさんが「ずっと前にもあんたに言っただろ、女はあれこれ余計なことは考えない方がいいんだよって」(P65)ともう一度繰り返される。馬お婆さんは時々麗沙を庇ってくれた親切な人なのであるが、こういう言葉を麗沙以外にも、特に身内の娘や嫁、孫にもしばしば語ることによって、旧式な思考方法を若い人にインプットする“世間”を代表している。女は無知で従順である方が幸わせ、結婚したら夫の色に染まれとの。女の忍従を強要する社会は、男にとっても息苦しい役割社会、上下関係を規制する社会であるのに。

麗沙の不幸のもう一つの要因は、彼女の性格にある。薄幸の美女を襲うのが重なる不幸であるのは定石だが、大学教育を受けた(大学及びそれに準ずる高等教育を受けた者は、中国では全人口比約1%)麗沙は、運命の前に全く手を束ねていた訳ではない。それなりに道を打開しようと闘ったのであるが、その方法がいかんとも拙劣である。そして一本気すぎて周囲の人を味方につけることができない。そこが華乃倩と決定的に異なっている。乃倩は同僚に人気があるし、彼女自身周囲に十分心配りもし人間関係の維持がうまい。また個人的な悩みで職場に影響を与えたりすることもない。この点、女と男の関係においてさえ、周兆路よりも負の部分の部分をずっと多く受持ちながらも自立しているし、大人である。

ついでながら乃倩も麗沙も子供がひとりずついて、可愛がっているようなのだが、離婚を考える際、その存在があまり大きくないのが不思議と言えば不思議である。思うにだいたい共働きの中国では、子供は祖父母や保育施設で育てられる場合も多いし、日本と比較すると何と云っても人手を頼みやすい点が大いなのかもしれない。乃倩の子供は8才の男子で祖父母の所にしばしば行っており、麗沙の娘は大学生で寄宿舎生活をしているらしい。

ともかく麗沙は孤立無援、矢折れ力盡きて井戸に身を投げるほかなかったが、約20年の年令差

のある乃倩はずっと上手に、旧道德のしがらみは断ちきり、自分の意志と能力で自分の人生を切り開いていき、決して井戸に身を投げることはないであろう。それは乃倩の性格もあるが、両者の20年の時代差が実に大きくものを言っている。乃倩が生きていけるということは、麗沙を追いつめた極左思想と結びついた旧道德の残りかすが、すでに乃倩を追いつめる力を持っていないことを示している。社会は確実に動いており、人々の考えは変っていくのだ。

四.

中国ではこれまで何度も文芸作品が、果して作者にそんな意図があったのかどうかは別として、牽強附会と言うか断章取義と言うか、換言すれば共産党から邪推されて非難されたり、権力闘争に利用された例がある。そのひそみにならって、共産党員である周兆路が中国を、華乃倩が甘い言葉をささやく資本主義国を象徴するとも読んでみた。中国は美しく装った西欧先進諸国が、甘い淫蕩な罠を持って近づいてくるのに幻惑される。最初は餌のおいしさに夢中になるが、やがてその甘美なものが、ただ自分の魅力によって憧れて近づいてきたのではなく、美女の欲求不満解消の道具として自分がしぼりとられようとしていると疑い出し、自分が迷ったのは相手の魔術にかかったのだ、責任はすべて相手にあると叫び、問題が引きかけている貞節かつ従順な自分の家族との絆に立ち返る。すると地位も上り、前途が開けて来、自分は正しかったと自画自讃する。

中国の経済開放政策は、確実に沿海地方の人々の生活水準を高めている。

内陸部との経済格差の拡大は今後大きな問題となってこようが、いまはそれを置くとして、生活に余裕が生じてくれば人々はものを考えるようになり、識字率及び学歴の向上、海外生活経験者の増加、外国からの情報の摂取等々、その延長線上に派生するものの一つとして、不倫や離婚の増加がある。犯罪の増加や綱紀のゆるみも目立つ。つまり一つの価値観では人々を統一しきれなくなっているのである。これらプラス面、マイナス面を含めて中国は、このさきかなりの変貌を遂げられると思われる。政治の民主化を退け、共産党一党独裁堅持はいつまで続けられるだろうか。

引 用 作 品

- 白 渦 劉恒著 当代情愛小説選《小説選刊》編集部編 中国広播電視出版社 1989年5月第1版
井 陸文夫著 1985年中篇小説選(第二輯) 人民文学出版社 1986年11月第1版

(平成4年10月23日受理)